

# 保護者と教師の面接における教師の言語コミュニケーションの分類

ーロールプレイ逐語録に基づくカテゴリー構成ー

上村恵津子 附属教育実践総合センター

石隈 利紀 筑波大学心理学系

教師, 保護者, 面接, 言語コミュニケーション, コンサルテーション

## 1 はじめに

学校では、軽度発達障害、いじめ、不登校、学級崩壊等さまざまな子どもの問題に対応することが求められている。このように多様化する子どもの問題に対しては、教員だけでなく医療や福祉等他領域の専門家を含めた援助チームを構成し支援を計画・実践することが重要とされている(石隈, 1999)。このような援助チームにおいて、保護者は子どもの養育の専門家であると同時に子どもの代弁者としての役割を担うという点で、援助チームの重要な一員として考えられるようになってきた(石隈・小野瀬, 1997; 上村・石隈, 2000; 田村・石隈, 2003)。つまり、援助チームがその役割を十分に発揮するためには、保護者と教員、他の専門家が有効に連携する必要があるのである。

しかし、保護者との連携は必ずしもスムーズにいくとは限らない。特に、保護者と教師との連携に関して言えば、子どもと共有する場が異なるため、それぞれが把握している子どもの実態も異なりやすい。さらに、教育観、人生観の違いから子どもへの期待にずれが生じることもある。このような両者の「すれ違い」が問題をさらに複雑にし、新たなトラブルを発生させることもある(田坂, 2003)。このような「すれ違い」に対処し、保護者との信頼関係を構築し、連携を図ることが教師には求められている。

このような「すれ違い」に対し、教師はどのように保護者に対応すれば、信頼関係を構築し、連携を図ることができるのだろうか。

保護者に対する教師の有効な対応方法については、経験や事例に基づき多くの提言がなされている。山口(2005)は、教師の「客観的な判断」、「安定した学校生活」、「安定した家庭生活へのアドバイス」が、母親の「あせり・不安」を軽減につながるとしている。田坂(2003)は、母親との信頼関係を築き協力関係を構築するには、客観的事実の伝達、共通した視点による問題の共有、共同での問題整理が重要であるとし、このためには、母親への励まし、一緒に指導しようとする気持ちの伝達、母親の悩みを聞きそれを理解しようとする姿勢の呈示といったポイントを上げている。この他にも、トラブル事例を基に保護者への対応をまとめた提言(保護者と教師のトラブルを考える会, 2004)、母親の行動特徴ごとに教師の対応方法をまとめた提言(梶・橋本・寺崎, 2003)、教師のタイプ別に保護者とのコミュニケーションの在り方をまとめた提言(稲田, 2002; 高垣, 2002)等がある。これらの提言では、概して、「母親の話をよく聞く」傾聴的態度、「励ます」、「自信をもたせる」「一緒に考える態度を示す」「母親の味方になる」等情緒的なサポートが重要視されているのが特徴といえる。しかし、これらの提言はいずれも経験や事例に基づいたものであり、限界があるといわざるを得ない。

一方、小学生の父母を対象に調査を行った上村・石隈(2000, 2001)は、母親が評価的な働きかけよりも道具的・情緒的な働きかけを援助的にとらえるのに対し、父親は報告的・道具的な働きかけをより援助的にとらえる傾向があることを明らかにした。さらに、特別な教育的ニーズのある子どもの保

護者を対象にしたアンケート調査を行った緒方（2003）は、保護者と教師がよい関係を築くために学校あるいは担任が配慮してくれたこととして、「子どもの状態にあった学習内容の準備」「話をしたいという保護者の要望に応じる担任の姿勢」といった配慮を保護者が多くあげてを明らかにした。

これらの結果は、保護者に対する教師の働きかけの種類により保護者の評価が異なるということを示している。今後、保護者と教師の連携を促進する教師のアプローチをより具体的に論じるには、教師の働きかけの実態を把握することが重要であろう。しかしながら、保護者との面接場面において、教師がどのような働きかけを行っているか、その実態を明らかにした研究はない。

関連する研究として、診察場面における医師と患者のコミュニケーションパターンを明らかにした Street(1992)の研究がある。Street(1992)は、患者と医師との会話を録音し、その記録から医師の言語コミュニケーション行動を分類し、医師のコミュニケーション行動の特徴を明らかにしている。医師の言語コミュニケーション行動は次に示す 10 カテゴリーで分類されている。すなわち、「情報提供」「指示」「パートナーシップの構築」「ポジティブな社会情緒的声かけ」「社会的会話」「ユーモア」「質問」「身体的検査に関する発話」「子どもへの声かけ」「その他」の 10 カテゴリーであった。

そこで、本研究では、教師と保護者の面接場面における教師の言語コミュニケーションに焦点をあて、その特徴を明らかにするための分類項目を検討することを目的とする。具体的には、教師と保護者の面接を想定したロールプレイを実施し、教師の言語コミュニケーションを Street(1992)のカテゴリーを参考に分類し、保護者と教師との面接場面の特徴を踏まえカテゴリーの修正を試みる。

## 2 方法

### (1) ロールプレイ

①実施時期：平成 16 年 5 月 27 日

②対象者：小学校教諭 1 名（教師役）、養護学校教諭 1 名（母親役）

③ロールプレイの内容

登校をしぶりはじめた小学校 1 年生女子児童の母親と担任教師との面接を想定した。

ロールプレイに先立ち、対象者には、以下のように指示した。「これから、2 人 1 ペアで保護者と教師が面接するロールプレイを 20 分間行います。ロールプレイは、小 1 女子の母親が最近登校をしぶり始めたことについて相談をしに来た場面です。ロールプレイはテープで撮らせていただきます。なお、ロールプレイ終了後に簡単な質問用紙を配布しますので、ご記入をお願いします。では、まずはじめに役割分担を決めてください。」

対象者 2 名の協議により、ロールプレイの役割が上記のように決定した。

その後、教師役と母親役それぞれに補足説明の用紙を配り、黙読させた。補足説明の内容は資料 1 に示す通りである。

ロールプレイの開始にあたり、教師役には面接時間を気にしながら面接が終了する所までロールプレイを実施するよう指示した。

④記録：ビデオ録画と MD による録音を行った。ロールプレイ後、MD からロールプレイの逐語録を作成した。

### (2) 教師の言語コミュニケーションの分類

教師の発話の分類には、Street(1992)が医師の言語コミュニケーションの分析に用いた 10 カテゴリー（情報提供、指示、パートナーシップの構築、ポジティブな社会情緒的声かけ、社会的会話、ユー

モア、質問、身体的検査に関する発話、子どもへの声かけ、その他)に基づくこととした。このうち「身体的検査に関する発話」は、医療での診断場面特有のカテゴリーであり、教師と保護者の面接場面のカテゴリーとしては不適切と判断し削除した。また、保護者と教師による面接であり、「子どもへの声かけ」という項目も必要がないため削除した。したがって、教師の発話を8カテゴリーで分類することとした(表1)。

なお、分類は教師1名、心理学者1名、心理学を専攻する大学院生3名で行った。分類後、カテゴリーについての感想を自由記述で尋ねることとした。さらに、分類の一致率を確認することとした。

表1 教師の言語コミュニケーションの分類カテゴリー

カテゴリー	カテゴリーの内容
情報提供	一般的な情報提供、事実、意見、記述等を示す発言
指示	「〇〇をしないで」と形式の指示、「〇〇するのはどうですか」と形式の推薦
パートナーシップ構築	保護者が意見や質問、感情、心配を表現できるように促す発言 保護者の意見への同意
ポジティブな社会情緒的発話	安心や支援、共感、その他相互関係に関わる発話
社会的会話	あいさつ、「ありがとう」「すみません」等の会話
ユーモア	
質問	
その他	あいづち等、

### 3 結果および考察

#### (1) ロールプレイの言語コミュニケーションの概要

ロールプレイ全体の時間は23分44秒であった。この間、教師と保護者の発話の交替は68回あった。発話交替を区切りとして発話回数および発話時間をカウントすると、教師の発話は35回で11分27秒、保護者の発話は34回で12分17秒であった。それぞれの発話時間数の割合を見ると、教師役が48%、母親役が52%であった(図1)。

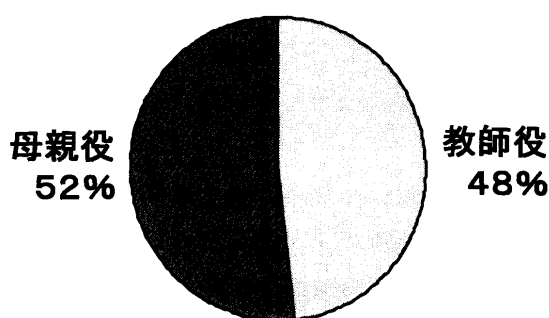


図1 教師と母親それぞれの発話時間数の割合

#### (2) 分類者間の一致率

教師役の発話の分類に先立ち、1回の発話に複数のカテゴリーが含まれるものを下位カテゴリーに基づき分割した。その結果、35回の発話のうち複数のカテゴリーを含む発話は11回あり、分類対象となる発話は50となった。

これら50の発話を分類担当者5名で分類した結果、一致率は69.6%であった。

分類後に記入を求めた自由記述による感想からは、まず分類基準に関する課題があげられた。具体

的には、「保護者の意見や質問を促す『パートナーシップ構築』の中には『質問』の形式に近いものがあり分類に迷った」、「パートナーシップ構築とポジティブな社会情緒的発話の違いがわかりにくかった」などの意見が見受けられた。また、「1つの発話の中に複数のカテゴリが含まれる発話がある」といった意見もあった。

そこで、各カテゴリ別の一致率を見てみたところ、「社会的会話」のカテゴリにおける一致率が93.3%と最も高かった。また、「ポジティブな社会情緒的発話」「指示」「質問」の一致率は、80%以上であった。しかし、「パートナーシップ構築」は50%台、「ユーモア」「その他の声かけ」は40%台といずれも低かった（表2）。

表2 カテゴリ別一致率

社会的発話	93.3%
ポジティブな社会情緒的発話	86.7%
指 示	84.0%
質 問	80.0%
情報提供	61.3%
パートナーシップ構築	54.3%
ユーモア	40.0%
その他	46.7%

これらの結果から、「情報提供」「パートナーシップ構築」「ユーモア」の分類において混乱が生じやすい傾向があることが明らかになった。

そこで、これら3つの発言の分類状況を調べたところ、保護者の意見や質問、感情、心配等の表現を促す「パートナーシップ構築」として分類された発話においては、「またいつでも声をかけてください」といった発言がポジティブな社会情緒的発話として分類されやすく、「これ以外に何かありますか?」「他にはいいですか?」といった発話が質問として分類されやすいために一致率が低下していることが分かった。また、「ユーモア」は、情報提供、指示等の分類と混乱しやすい様子が見られた。あいづち等の含む「その他」は、パートナーシップ構築として分類されやすいことが明らかになった。

このような分類作業における混乱を避けるためには、まず、分類の定義および分類基準をより明確にすることが必要と思われた。特に、混乱が多く見られた「パートナーシップ構築」「ユーモア」の定義を明確にする必要がある。さらに、分類担当者が本研究における分類基準を理解するためのトレーニングを行う等の事前準備も必要と思われる。

また、1つの発話内に複数のカテゴリが含まれていることによる混乱も見られたため、1つの発話をどのような単位で捉えるかという分類単位も明確にする必要がある。今回、分類単位の決定にあたっては、教師役の発話が始まってから保護者役の発話が始まるまでの発話を1回とし、1回の発話内に複数のカテゴリが含まれる場合にはカテゴリ別にあらかじめ分割し、分類単位を決定した。このような分類単位の決定方法では、分類単位を分割する段階で既にカテゴリによる分類に対する判断が組み込まれることになる。発話の分類に先だち、分類基準と合わせて分類単位に関する定義を明確にすることが今後の課題である。

### (3) 教師役の言語コミュニケーションの分類

分類結果は表3に示すとおりである。これによれば、情報提供が15回と最も多く、次いで質問が13回、パートナーシップ構築が7回と続いた。これらの発言について時間数による分類を行ったところ、発話数同様に情報提供が最も多かったものの、次いで多かったのは指示(2'01")、質問、パートナーシップ構築と続いた。

表3 教師役の言語コミュニケーション分類  
—発話数および時間数による分類結果—

カテゴリー	発話数	時間数
情報提供	15	6'31"
質問	13	1'36"
パートナーシップ構築	7	40"
指示	5	2'01"
ポジティブな社会情緒的発話	3	11"
社会的発話	3	05"
ユーモア	1	20"
その他	3	03"

さらに、これらの発話を時間数による割合で見ると、情報提供が55%と半分以上を占めており、次いで指示18%、質問14%と続いていた。これら3カテゴリーで、教師の言語コミュニケーションの全体の87%に達していた(図2)。

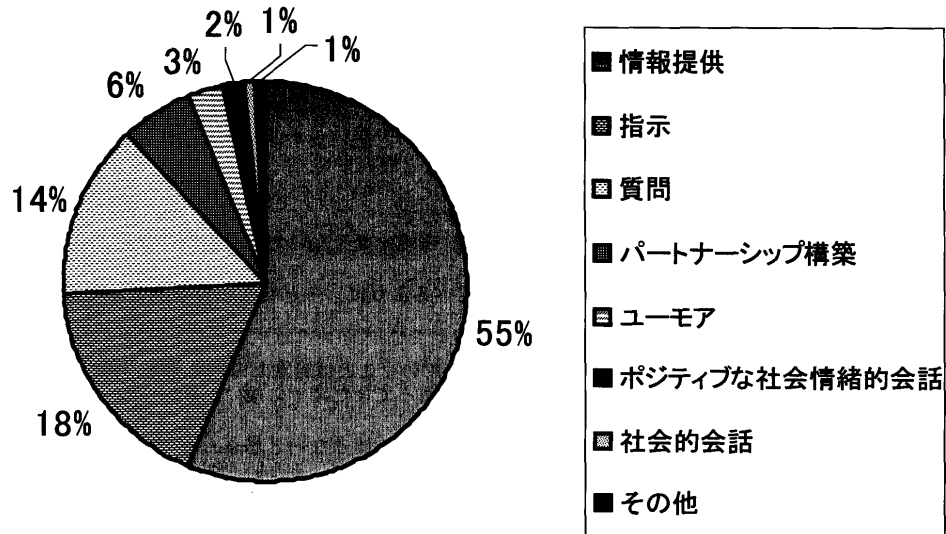


図2 教師役言語コミュニケーションのカテゴリー別割合

そこで、半分以上を占めていた情報提供について、該当する15の発話内容の検討を試みた。その結果、情報提供は「事実および一般的な知識に関する情報提供」、「今後の対応に関する情報提供」、「教師の意見に関する情報提供」の3種類に大別された(表4)。

事実および一般的な知識に関する情報提供とは、「給食当番の子にはみんな同じようにっていう風に配らせるんですね」、「1年生にはいると、ちょっと幼稚園からは上上がった感じで、大きくなったって意識があるんですね」等のように現状や事実、一般的な傾向に関する情報を提供している発話である。これに対して今後の対応に関する情報提供は、「今日の帰りまでにはちょっと本人と話をしてみます」「私の方でちょっと減らしたら、うまく減らせるようにしたいと思います」等の

ように教師が今後どのように対応するかについての情報を提供している発話である。また、教師の意見に関する情報提供は、「班長さんっていい経験だと思いますので」「そういうところが彼女の負担になるのかなって見てますけれども」等のように教師がどのように考えているか、意見を明らかにする発話である。

表4 情報提供に関する発話の下位カテゴリー別発話内容

発話内容
<p><b>&lt;事実および一般的な知識に関する情報提供&gt;</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・確かにね、班長さんをやって頂いたりね、あと、給食も確かに問題なんですけれども、給食の方、私の方ではね、「残したい」って言った時に、「もう少し頑張ってみたら」って声かけをしてるんですけれども、</li> <li>・えっと、じゃあ学校ではね、量的な問題であれば、その一多少減らしたりとかそういうこともできるんですけど、一応まだね1年生ですので、あの給食当番の子にはみんな同じようにっていう風に配らせるんですよ。</li> <li>・だいたい、あの、グループのノートを集めてきてとか、配布物を持って行ってもらったりとか、あとそうですえ、あの休み時間が終わって戻ってきた時に、みんながいるかどうかっていうのを見てもらったりとか、そんな感じなんですけど。一応クラスのね、身近にいるお友だちを良く知ってもらっていうか、だいたいそんな感じで、それほど高学年のような班長さんのような役目じゃないんですけど、</li> <li>・やっぱり1年生に入ると、ちょっと幼稚園からはこう上に上がったって感じで、大きくなったっていう意識があるんですよ、子どもの中で。</li> <li>・そうですね。お友達も周りでみてね、「遅い」って言ったりする子がね、見たものをそのまま口にだしてしまうのが1年生なので、</li> </ul>
<p><b>&lt;今後の対応に関する情報提供&gt;</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・じゃあ、給食の方は、明日また本人と聞きながら一番いい方法で、あの、好き嫌いの場合にはね、少しでも頑張らせたいっていうのがあるんですけど、ま、量的にね、あと時間の問題でね、本人がどうしてもダメっていう時はね、「頑張れ、がんばれ」と言ってもね、困りますのでね、あの、この程度なら周りの子もあんまり気にならないでやれるっていう所で、あの、見てみたいと思います。で、あの、子どもに言うのではなくて、私の方でちょっと減らしたら、うまく減らすように。うん。また、徐々に、量と同じくらいに増やしていきたいと思うんですけど、ま、あの、かえる時にはお母さんにも連絡しますので、お家での様子をちょっと伝えて頂いて、それで、様子を見ながらね、やっていきたいと思いますので、うん。</li> <li>・じゃあ、今日帰りまでには、ちょっと本人とも話をしてみます。えっと、学校行きたいとか行きたくないという話ではなくて、えっと、給食こういことこういう風にしてみようねっていうことと、あと班長で頑張ってきたことについて、彼女に話をしてみたいと思います。それで、また明日の朝の様子で、お母さんからご連絡を待って、それで私の方で行動したいと思うんですけども。今日は、多分その話のあとで、お家に帰ってからね、母さんが本人が何かお話ししてくれるようには、本人にいいたいと思いますけれども、もし、何も出ないようでしたら、お母さんの方から何か、ちょっと聞いて頂けるといいと思います。</li> <li>・声をかけていきますね。</li> <li>・その変化によって指導していきたいと思いますので。</li> <li>・はい。分かりました。じゃあ、今日、教室で、環境を変えないで、教室の中でちょっと呼んで話をしてみたいと思います。</li> <li>・休み時間なんてね、いろんなことを子とあそべるように、子どもたちの様子を見ながら、また誘って一緒にやってみますね。</li> </ul>
<p><b>&lt;教師の意見に関する情報提供&gt;</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・そうですね。でも、本人はね、周りより遅いっていうことは自覚していると思うんですね。</li> <li>・多分声を掛けたりとかね、なかなか休み時間に戻ってきた時その後、掛けたりとかね、そういうことが負担なんじゃないかなとおもうんですよ。</li> <li>・うん。あのノートをもってきて、それは別に、それほどないと思うんですけど。私の方から見ていて、やっぱりお友達を集めたりとか、ノートを出してって言ったりとか、そういう所が彼女の負担になるのかなって見てますけれども。</li> <li>・うん。大丈夫ですよ。ただ、幼稚園の時から比べるときちんとこの時間が区切られてるので、本人の中でもそういう目安はあると思うんですよ。切られてるので、本人の中でもそういう目安はあると思うんですよ。ただ、なかなかかきちゃんとやりたいという性格なのでね、そのところは、なかなか変えていくっていうのは難しいですし、やっぱりいい点としてね、認めて、その中で、本人がどういう風に時間を使っていくかっていう、これからの課題だと思うんですよ。</li> <li>・あの、決してできない訳ではないので、あの、とでもね班長さんっていい経験だと思いますので、</li> <li>・多分1学期間ですので、できればね、違う自分が見えるって言うこともあるのでね、是非ね、順番に班長さんは1年生のうちには班長さんやってもらいますんで、できれば、頑張ってるってやってもらって、自分のいろんなところを発見できたんじゃないかなって思うんですけど。</li> <li>・少しその一なんて言うのかな、幼稚園の時の対応と、小学校に入ってからの対応を変えていただけると、すごくお姉ちゃんになったっていう気持ちが出てきますので、少しずつそういうことから違ってくると思うので、</li> <li>・うーん。私の方でもね、少しずつあの一手を入れていきたいとは思いますが、決してね、あの、できないお子さんではないので、うん。だからまた、ちっちゃく活躍？サポートしてもらったりとかね、私なんかよりも友だち同士の方がいいところもあるので、あの、できるとは思いますけれどもね。</li> <li>・一緒に声かけてもらったりとか、そういうことを通して少しずつね、できるんだっていうことを、これから学校生活楽しくなるとは思いますので、うん。</li> <li>・そこはまだ、1年生の段階ですので、焦らないで、やっぱりそれが几帳面だっていうことがいけないって本人が思わないように、うん、ここはいい点なんだから、うまくのぼして、もうちょっとこう、時間を見ながら、うまく動いていこうねって感じて眺めていければって思ってますけど。1年のうちにはそう焦らないで、うまくやっていたらと思いますけど、</li> </ul>

情報提供に関する発話をこれら3種類の下位カテゴリーで分類するため、15の発話をその内容に基づき分割した。その結果、15の発話は22に分割された。これら22の発話について、心理学の専門家1名、心理学専攻の大学院生3名により3下位カテゴリーによる分類を行った。その結果、一致率は89.8%であった。下位カテゴリーごとの一致率を見てみると、「今後の対応に関する情報提供」が96.8%と最も高く、「教師の意見に関する情報提供」が86.1%、「事実および一般的な知識に関する情報提供」が85%と続いていた。

分類結果を見てみると、事実および一般的な知識に関する情報提供が5回（1分23秒）、今後の対応に関する情報提供が8回（2分29秒）、教師の意見に関する情報提供が9回（2分36秒）となっていた（表5）。これらの発話を時間数による割合で見ると、教師の意見が41%、今後の対応に関する情報提供が38%とほぼ同じ割合であり、次いで事実および一般的な知識に関する情報提供が21%となっていた（図3）。

表5 情報提供に関する発話の下位分類に基づく  
発話数及び発話時間数

下位カテゴリー	発話数	時間数
事実及び一般的な知識	5	1'23"
今後の対応	8	2'29"
教師の意見	9	2'36"

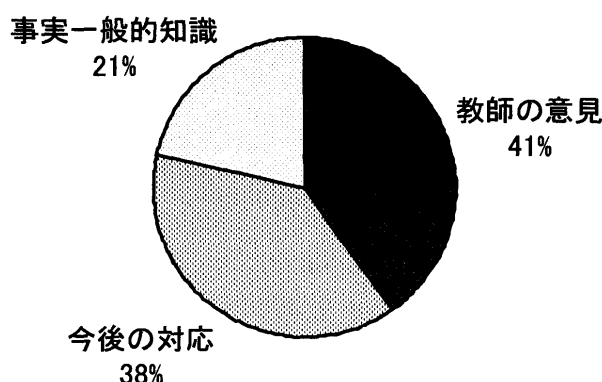


図3 情報提供に関する発話の下位カテゴリー別割合

教師の言語コミュニケーションのうち、「情報提供」をさらに「事実および一般的な知識に関する情報提供」、「今後の対応に関する情報提供」、「教師の意見に関する情報提供」の3下位カテゴリーに分類するにあたっては、分類担当者間の判断に大きな差は見られず、安定した判断が可能であることが示唆された。

#### 4 総合考察

保護者との面接場面における教師の言語コミュニケーションの実態を把握するためのカテゴリーを

検討するために、診察場面における医師と患者のコミュニケーションパターンを明らかにした Street (1992) のカテゴリーを用い、保護者と教師の面接場面を想定したロールプレイの逐語録の分類を試みた。分類にあたっては、Street (1992) が用いた 10 カテゴリーのうち、保護者と教師の面接場面のカテゴリーとして不適切と思われる 2 カテゴリーを除いた 8 カテゴリーを用いた。

分類を行った結果、8 カテゴリーの分類のうち、「社会的会話」「ポジティブな社会情緒的発話」「指示」「質問」の一致率は 80%以上と高かったものの、「パートナーシップ構築」「ユーモア」「その他の声かけ」の一致率は 40～50%台と低かった。分類状況を調べたところ、「パートナーシップ構築」は「ポジティブな社会情緒的発話」「質問」と混乱しやすく、「ユーモア」は「情報提供」「指示」と混乱しやすい様子がうかがわれた。これらのカテゴリーを用いるには、混乱しやすいカテゴリーとの区別が明確になるよう、それぞれのカテゴリーの定義をより明確にすることが重要と思われた。

分類の結果、今回分析したロールプレイにおいては、教師役の言語コミュニケーション全体の半分以上が「情報提供」であることが明らかになった。これらの「情報提供」をさらに分類したところ、「事実および一般的な知識に関する情報提供」、「今後の対応に関する情報提供」、「教師の意見に関する情報提供」の 3 つの下位カテゴリーに分類できることが分かった。これら分類の一致率は 89.8%と高かった。さらに、3 つの下位カテゴリーの発話時間数による割合は 20～40%であり、3 下位カテゴリーの割合に大きな差は見られなかった。

これらのことから、保護者と教師の面接場面における教師の言語コミュニケーションの分類にあたっては、「情報提供」のカテゴリーを「事実および一般的な知識に関する情報提供」、「今後の対応に関する情報提供」、「教師の意見に関する情報提供」の 3 カテゴリーに分割して分類する方が、より教師の言語コミュニケーションの実態を詳細に捉えることにつながるのではないかと考えられた。

ただし、今回分類を試みたのは 1 ケースのロールプレイである。さらにケースを増やし、分類基準の妥当性を検証を行った上で、教師の言語コミュニケーションの実態を明らかにする必要がある。

#### 引用文献

- 稲田百合 2002 信頼関係の基礎を作るコミュニケーション能力は、今や教師にとって必須能力—教師のタイプ別に考える保護者とのコミュニケーション— 総合教育技術, 57(13), 66-71.
- 石隈利紀 1999 学校心理学—教師・スクールカウンセラー・保護者のチームによる心理教育的援助サービス— 誠信書房
- 石隈利紀・小野瀬雅人(代表) 1997 スクールカウンセラーに求められる役割に関する学校心理学的研究—子ども・教師・保護者を対象としたニーズ調査より— 文部省科学研究費補助金(基盤研究(c)(2))研究成果報告書(課題番号 06610095)
- 保護者と教師のトラブルを考える会 2004 トラブル事例から考える学校・教師が身に付けたい、保護者への上手な対応法 総合教育技術, 59(1), 78-83.
- 梶千枝子・橋本定男・寺崎千秋 2003 こんな母親にどう関わるか—担任による母親支援— 児童心理, 57(14), 98-108.
- 上村恵津子・石隈利紀 2000 教師からのサポートの種類とそれに対する母親のとらえ方の関係—特別な教育ニーズを持つ子どもの母親に焦点をあてて— 教育心理学研究, 48, 284-293.
- 上村恵津子・石隈利紀 2001 教師からのサポートの種類とそれに対する父親のとらえ方の関係—特別な教育ニーズを持つ子どもの父親に焦点をあてて— LD研究, 10(1), 59-69.
- 緒方明子 2001 インクルージョンに関する要因の検討(2)—保護者と教師の相互作用について— 明治学院論業 心理学紀要, 11, 59-62.
- Street, R.L. 1992 Communicative styles and adaptations in physician-parent consultations Social Science & Medicine, 34(10),



1155-1163.

高垣 潤 2002 保護者とのコミュニケーションには、仲立ちとなる「生徒」の存在が重要—教師のタイプ別に考える保護者とのコミュニケーション— 総合教育技術, 57(13), 72-79.

田坂宜文 2003 担任と母親の協力関係を築くために—共に歩む— 児童心理, 57(14), 88-92,

田村節子・石隈利紀 2003 教師・保護者・スクールカウンセラーによるコア援助チームの形成と展開—援助者としての保護者に焦点をあてて— 教育心理学研究, 51, 328-338.

山口菜穂子 2005 教師はどのように母親を支えるか 児童心理, 59(5), 35-39.

資料：ロールプレイ補足説明用紙

**先生用】**

あなたは1年2組の担任です。

今朝、あなたのクラスのAさんは、お母さんと一緒に少し遅れて登校してきました。その際、お母さんより「子どもが学校に行きたくないと言っている」との訴えがありました。あなたは、「せっかくだらして下さったので少しお話ししましょう」とお母さんをお誘いしました。

Aさんは比較のおとなしいお子さんですが、学習面でも生活面でも特に問題は感じられません。作業ペースは決して速いほうではありませんが、几帳面な性格なこともあり、班長をやっています。

思い当たることと言えば、給食の時に時折「残したい」と訴えに来ることくらいです。このような訴えがあった場合には、「もう少しがんばってみようか」と声かけし、それでもつらそうな場合には残させることにしていました。

なお、面接時間は急な設定ということもあり、20分であることをお母さんに了解していただきました。

**【母親用】**

あなたのお子さんは1年2組のAさんです。

Aさんは最近「学校へ行きたくない」と言うようになりました。

理由を聞くと、「給食が食べられない、残したいと訴えても残させてくれない」とのこと。給食が食べられないと先生に怒られるのではと心配になっている様子です。

Aさんは比較のおとなしい性格です。几帳面な所もあり、何事もきちんとやりたいという思いがある反面、作業ペースは決して早いほうではありません。

お母さんは、Aさんが班長などを任されていることも含め、現在のクラスの生活はAさんにとって負担が大きいのではないかと感じています。Aさんが登校をしぶり始め、とにかく何とかしなくては・・・と思い、今朝思い切ってAさんと一緒に来校しました。

先生に会うと、「せっかくだらして下さったので少しお話ししましょう」と誘われ、面接することになりました。なお、面接時間は急な設定ということもあり、20分間であることを聞き、了解しています。

(2005年5月23日 受理)